

# 親鸞聖人假名聖敎用語の研究 (三)

三帖和讃に於ける敬語助動詞シムに就て

藤 谷 一 海

このシムの語はその活用に當つてはシメ(然將)シメ(用連)シム(止終)シムル(體連)シムレ(然已)シメヨ(命)と活らく助動詞であるが、このシメシム等が三帖和讃に用ひらてゐる場合を見るに、少くとも三様の形に現はれてゐる。

その一つはこの語の本來の任務なる「淨土ニ歸セシムルナリ」「ス、メテ念佛セシメケリ」等の如き使役相の用法であり、次は「佛足頂禮セシメツ」、「教主世尊ニマフサシム」等の如き敬相であり、今一つは「專精ニコ、ロヲカケシメテ」「ツネニ念佛セシムレバ」等の如く、一見使役相にも非ず、敬相にもあらずして、單に專精ニコ、ロヲカケテ・ツネニ念佛スレバと云ふ意味の所に斯くの如く用ひた例が多い。

この第三の場合のシメシム等は多く自己の動作の場合に用ひられるのである。例へば少し時代は遅れるが、蓮師の御文の中に「越前加賀諸所ヲ經廻セシメヲハリヌ」の如きがそれである。

諸て右の如く三様に用ひられるシムと云ふ語は、本來人をしてしかせしめると云ふ使役の意を表はす時、動詞に添つて之を助けて用ひられる語であるが、それがどうして敬語助動詞として他を敬ふ場合他語に添へて用ひられるやうになつたかと云ふに、これは言語の變化に依るものである。曾て大槻博士は「廣日本文典」の中に「勢相使役相ノ助動詞ハ全ク其意義ヲ變ジテ他ノ動作ヲ敬ヒ言フ語トナルコトアリ」と云はれたのはそれである。然らばどうしてかゝる變化を起して來たかと云ふことを按ずるに、之れ恐らく尊貴の人の動作を言ふに親しくものと云ふよりは何事をも能く侍者を使役して、せさる權位あるやうに常に言ひ倣すと鄭重に聞える故、尋常の動作までも使役相に用ひた久しい間の慣用の結果であらう。

又古來動詞「立ッ」「行ク」「知ル」「聞ク」等が添つて「立タス」「行カス」「知ラス」「聞カス」の如く佐行四段活用に変じて敬語となつたものに使役相の「ス」がある。この用例は既に萬葉集等に見えて古く用ひられたのであるが、然し「タ、ス」「行カス」等の場合は多くア列からのみ佐行四段に活らく慣例であり、シメシム等の場合は、ア列からもエ列からも續き、それ自身は下二段に活用するのでから自らそれは別なものである。

次に第三のシムの用法を按ふに、之は上に述べたシメシム等の用法の更に轉化したるものであらう。即ち第二のシメシム等が上に説明したる如き意味に於てその動作をあらはす動詞につけて用ひ

られるに對して、この第三のシムは自己の動作を卑下して、他をして自己を驅使せしめる如き意でその動作を現はす動詞に添へて用らるものである。されば先の第二の場合のシムを敬稱のシムと云ふならば、之は敬相の中の謙稱のシムと云ふべきである。

私は第三のシムの用法に就て斯くの如き考察を下して來たのであるが其の後、山田博士の「日本文法論」を披見して殆ど之と同意の事を述べられてゐるのに氣附いて聊か意を強うするに至つた。使役相のシムが對者の動作を敬ふ場合にその動詞に添つて敬稱として用ひられることは博士も大槻博士と殆ど同意見なるが、偕てその次に山田博士は、

又「しむ」に限りて對者の動作を崇敬せずして自家の動作を卑下して云ふことあり、これ實に使令の原義を直接に移したるにて高貴の人に對して自家が使役せらるゝ意を寓したるものなりとて、その例に

皇太后の宮にいかで啓上せしめむ

一筆啓上せしめさふらふ

等の例を擧げてゐられる。

これ今私が云ふところの意と殆ど同一であることを知る。斯くて第二第三は何れも敬相なりと云ふことが出来る。さればこの第三の場合のシメシム等は今普通俗語に云はれるところの「させて貰

ふ」とか「させて戴く」と云ふ語の意に近い。例へば「歡喜讚仰セシムレバ」「佛慧功德ヲホメシメテ」等何れも、歡喜讚仰をさせて戴けば、佛慧功德を讃めさせて戴いて等と譯すればよいのであらう。されば先に挙げた二例も「專精に心をかけさせて頂き、つねに念佛させて戴けば等と解したらよいのである。純な宗教的感情の盛られた和讃等にかうした言葉遣のせられることに何等の不自然さのあらう筈がない。

「シム」の三帖和讃に於ける三様の用法は大體右の如くであるが、この用法は三帖を通じて何れの場合もひとしく用ひられてゐるかと思ふに然らず。第二第三の用法即ち敬稱謙稱の用ひられねばならぬ場合に、それが用ひられずに普通の動詞の用ひられた例は澤山ある。これ全く和讃と云ふ字句の數に限りがあり、音調を整へねばならぬと云ふ讃歌としての制約より當然免るべからざる現象である。これらのことからその反對にさまで必要のない所まで字句と音調を整へる爲に敬相が用ひられた例もないではない。これ亦已むを得ない成行と云はねばならぬ。

偕てこのシムの一連は如何なる語に添つて用ひられるかと云ふに、それは動詞の將然形に連つて用ひられるのである。その中使役相及び敬稱の形をとるものは多く四段、下二段及び漢語から來る佐行三段の活用をなす動詞を助けるが、謙稱の形をとるものは、多く下二段と佐行三段活用の動詞に連つて、四段活用の動詞に連ることは稀である。

右三様の用法に就て次に和讃三帖に互つてその用例を拾つて見る。

一、使役相のシムの用例

慈光ハルカニカフラシメ	(浄)	八
本願弘誓ニ歸セシムル	(浄)	十六
衆生ヲ佛土ニイラシムル	(同)	四二
十方ノ有縁ニキカシメン	(同)	四八
カナラス滅度ニイタラシム	(同)	大經九
安樂世界ヲエラハシム	(同)	觀經一
是稱陀羅トハチシメテ	(同)	同四
淨土ニ歸セシムルナリ	(同)	勢至八
ス、メテ念佛セシメケリ	(高)	龍樹一
スミヤカニトクサトラシム	(高)	曇鸞一二
カナラス滅度ニイタラシム	(高)	曇鸞一八
弘願ノ信心守護セシム	(同)	善導八
法性常樂證セシム	(同)	同一二

發起セシメタマヒケリ

(同) 同 一三

ミナモロトモニ歸セシメテ

(同) 源空 六

拜見セシメタマヒケリ

(同) 同 七

門徒ニツネニミセシメキ

(同) 同 一三

定聚ノクラキニイレシメヨ

(末) 五六

佛智不思議ニツケシメテ

(同) 聖德 七

二、敬相のシムの用例。

(イ) 敬稱のシム

彌陀ノ功德ヲ稱セシム

(淨) 一一

頻婆娑羅王勅セシメ

(同) 觀經 二

闍王ツルキヲステシメテ

(同) 同 五

方便引入セシメケリ

(同) 同 七

闍王逆惡興セシム

(同) 同 八

ヒトシクヒトヘニス、メシム

(同) 小經 二

證誠護念セシメタリ

(同) 同 三

スナワチ座ヨリタ、シメテ	(同 勢至	一)
佛足頂禮セシメツ、	(同 同	一)
教主世尊ニマフサシム	(同 同	二)
念佛三昧オシエシム	(同 同	四)
彌陀ノ弘誓ヲス、メシム	(高 天親	一)
淨土ニフカク歸セシメリ	(高 曇鸞	一)
涅槃ノカトニソイラシメシ	(同 同	二)
五濁ノ群生ス、メシム	(同 道綽	二)
ヒトエニ專修ヲス、メシム	(同 善導	四)
菩提ノ道ニソイラシメシ	(同 源空	五)
金色ノ光明ハナタシム	(同 同	七)
綽和尙ト稱セシメ	(同 同	八)
源空光明ハナタシメ	(同 同	二三)
頭陀ヲ行シテ化度セシム	(同 同	一五)
念佛宗ヲヒロメシム	(同 同	一六)

コノ土ニタヒ／＼キタラシム

(同) 同 (同)

淨土に還歸セシメケリ

(同) 同 (二〇)

釋迦ノ遺教カクレシム

(末) 一七

願作佛心ヲス、メシム

(同) 一九

智慧ノ念佛サツケシム

(同) 三一

勢至念佛ス、メシム

(同) 三三

眞實信心ス、メシメ

(同) 五六

(ロ) 謙稱のシム

歡喜讚仰セシムレハ

(淨) 二八

稽首歸命セシムヘシ

(同) 三四

佛慧功德ヲホメシメテ

(同) 四八

却行而退セシメツ、

(同) 觀經 五

本願コ、ロニカケシメテ

(高) 龍樹 五

心行とモニエシムナレ

(同) 曇鸞 一四

悲願ノ心行エシムレハ

(同) 同 一五



利他教化ノ果ヲエシメ

(同 同 一六)

聖道ノ修業セシムトモ

(同 道綽 三)

專精ニコ、ロラカケシメテ

(同 同 六)

ツネニ念佛セシムレハ

(同 同 六)

法性常樂證セシム

(同 善導 一二)

イカテカ發起セシムヘキ

(末 一五)

願作佛心ハエシメタル

(同 稱德 卅三)

慶喜奉讃セシムヘシ

(同 稱德 九)

以上、三帖和讃のシムの用例を全部拾つたわけではないが、大體斯くの如く分類してみた。この他に尙、

罪福フカク信セシメ

(末、疑惑 一一)

賢善精進現セシメ

(同 述懷 二)

良時吉日エラハシメ

(同 同 八)

の如きシムの用例がある。これらは何れも自覺的自己がしかせしめられてゐる現實の自己を寫實したときにあらはれたところの使役相とみるべきであらうか。

勿論これは他が自己をしてせしめるものでも自己が他をせしめる意味のシムでもなければ自から上に擧げた使役相のシムともその内容を異にしてゐるわけである。

上に擧げたこれらの分類はその内容の關係からその分類上甚だ困難なものがある。全く同じ形のもので一は使役相に一は敬相に分類せねばならぬものがある。

例へば聖德太子和讃第七首(述如上)「佛智不思議ニツケシメテ」は文章の勢及調子より、佛智不思議

ニツケナサレテと解して右分類中の第二、即ち敬相の中の敬稱に屬せしめて解すべきものゝやうに見ゆるが、之は和讃の意味内容より、太子が佛智不思議に我々を從ヒツケシメテと使役相に解する説(吉谷師三帖和讃講述)説に従つて第一の使役相の分類に屬せしめた。これその和讃が據て立つ所の經文の内容及その解釋上等より、その分類の所屬を異にせねばならぬ所以である。

(註) 本稿の分類に就ては、吉谷三帖和讃講述冊三、開悟院 高僧和讃丁亥記、如說正像末和讃管窺錄を参考にした。

(附言) 使役相の助動詞にして、それが轉じて對者を敬ふ意の敬稱の助動詞となるものには上に擧げたシムの他に「ス」「サス」がある。されどそれが三轉して自己の動作を卑下して用ひる、所謂謙稱の助動詞として用ひられるものはシムに限る。